十和田市立　新渡戸記念館だより

新渡戸稲造の「文化人切手」

昭和27年発行の朝日新聞記事から

新渡戸稲造が50年ほど前切手になっていたことをご存知でしょうか。昭和27年(1952)文化人切手の１枚として稲造の切手が発行されました。当時の朝日新聞のスクラップブックを新渡戸館長が古書店より購入しましたので、そこから文化人切手のこぼれ話などをご紹介します。

◀新渡戸稲造の文化人切手（10円切手）昭和27年10月15日発行

令嬢が新聞に語ったエピソード

昭和27年11月１日からの朝日新聞18回連載記事『文化切手の人々』には、それぞれの文化人の生前を知る人の話がのっています。稲造の記事では「ドクター・ニトベの怖かったもの」として養女の故・こと子さん(当時60才)が語っていました。こと子さんによると「父が無条件に怖くて嫌いだったものは蛇」だそうです。ある時稲造博士と軽井沢で散歩していたところ、こと子さんが草むらにヘビを見付けて「パパ、ヘビよ」と振りかえると、稲造はすでに遠くに走って逃げていたそうです。

また、無条件に好きだが怖かったのが奥様の万里夫人。万里夫人はアメリカ出身ですが、当時数少ない国際結婚の中のすばらしい成功例と言われているお二人でも、風習の差から、夫人が稲造をたしなめることがよくあったそうです。国際人・稲造は長い海外生活を送りながらも、生活には日本趣味を多く残しており、たとえば好物はカラスミなど純和食でしたが、それに対して万里夫人は「日本食はことごとく不消化」と信じ切っていたそうです。食事の時など和服に着替えなければくつろげなかった稲造が、和服でおもわず椅子に反り返ってもたれ、シャツが袖からはみ出すと夫人が「イナゾー」といって注意することがあり、そんな時稲造はニヤニヤと困ったような顔をしながら姿勢を直していたそうです。

「父ほど妻に愛された男の人はまずいなかったでしょう。」こと子さんの語るエピソードからは、ほほえましい稲造博士と夫人の様子が目に浮かぶようです。

▲和服姿の新渡戸稲造と万里夫人。ヤンビー博士と。
（写真：バッケス幸子さん提供）

「文化人切手」のあれこれ

文化人切手は「文化の日」（11月３日）の制定を記念して昭和24年（1949）～27年（1952）に発行されたもので、新渡戸稲造を含め18名の文化人が切手となりました。その後、平成４年（1992）に文化人切手第二次シリーズが発行となり、以来毎年文化の日前後に２～３枚の切手が発行されています。

新渡戸稲造の切手は、同シリーズの第16番目に発行されました。この朝日新聞記事によると発行日は昭和27年10月15日となっており、稲造の命日です。また、切手の肖像画は稲造の葬儀の折遺影として使われた写真を基としていますが、それと対照的に現五千円札肖像画は、令嬢こと子さんの結婚式の時のお祝いの記念写真（当館所蔵）を基としています。

余談ですが稲造の切手の同シリーズには、現在の一万円札・福沢諭吉、千円札・夏目漱石、来年度発行新五千円札・樋口一葉、新千円札・野口英世の切手もあります。「お札と切手の博物館」ホームページによれば現在のところお札と切手、両方の顔となっているのは、現行のお札肖像の３人と神功皇后（じんぐうこうごう）、藤原鎌足（ふじわらのかまたり）、聖徳太子で、来年度には野口英世、樋口一葉がこの仲間入りとなります。

文化人切手・福沢諭吉（上/昭和25年２月発行）
野口英世（右/昭和24年11月発行）

▶朝日新聞記事「文化切手の人々」

平成14年～15年

館内感想ノートから

来館者からよせられた感想の一部をご紹介します

♥ 昔の大がかりな開拓工事は今の我々にはかり知れない苦労があったと思う。そういった歴史の上に成立っている十和田市をしっかり伝えるとともに、広く十和田市の外にもアピールして頂きたい。　（平成14年２月６日／十和田市民さん）

◆ “はやて”で来ました。やはり新幹線は早い。つくばからでも近いと思いました。息子が学生でこの地にお世話になっております。何度か来ましたが、中を見るのは初めてです。新渡戸家の歴史は十和田市の歴史であると思いました。稲生川が人工河川であることも初めて知りました。何度か訪れて初めて歴史を勉強する時間が作れたことをうれしく思いました。

（平成14年12月15日／つくば市民　T・Mさん）

♣ 今日はくさりかたびらの重さが４kgだと初めて知って、着てみたらすごく重かった。せんそうをする時、重いものを着たらやりにくいのでは？と思ったけど自分の命を守るためだからだね！（平成15年５月５日／三本木小学校４年生A・Tさん）

♥ 岩手県の照井土地改良区も今から900年前にできた照井堰を守り続けています。当改良区もぜひ、このような記念館を参考にし、後世に照井堰を伝え続けて行きたいと思います。

（平成15年11月７日／照井土地改良区　Eさん）

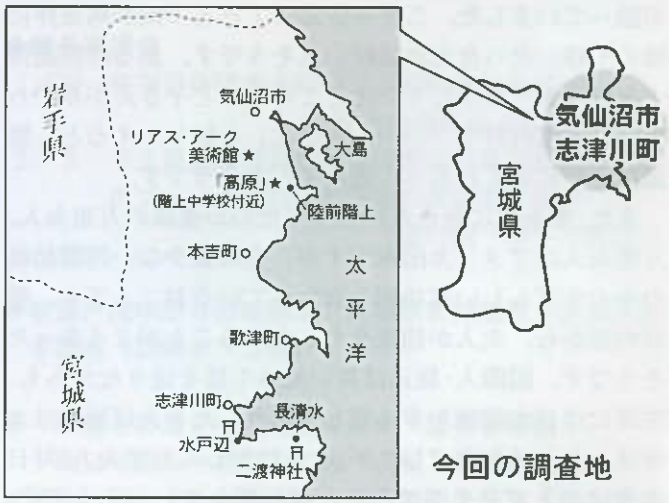
◆ マザーテレサと神谷美恵子先生を尊敬しています。神谷先生が書かれた本には新渡戸稲造のことが色々書いてあるのですが、新渡戸先生が後年になって、ある学校で小さい子供たちに「お前たちの体から後光がさすようにならなければならぬ。決して金の指輪とか、ダイヤモンドで外の光を放てというのではない。また、きれいな着物を着て光を放てというのではない。人間の体からはオーラという一種の光が実際に出る。その光は人格の修養である」とお話されたそうです。もし、新渡戸先生と同じ時代に生きていたら「先生、私はオーラを出してますでしょうか」とお聞きしたいところなのですが…。　（平成15年11月20日／H・Sさん）

新渡戸氏ゆかりの地をたずねて７

新渡戸の居城「高原城」をさがす

調査地：宮城県気仙沼市・志津川町／11月20～21日

平成７年より、『新渡戸氏系譜』の記載をもとに、「新渡戸氏ゆかりの地調査」を行っていますが、系譜によれば15世紀頃、新渡戸氏が２代（27代盛頼・28代頼胤）にわたり「元良（＝本吉）郡高原」を居城としたとあります。この「高原」が現在のどこかわかっておらず、少ない手がかりをたどって旧本吉郡内を調査していました。そんな折に、気仙沼在住の郷土史家・熊谷康雄氏よりいただいた情報から、気仙沼市立階上公民館所蔵「長磯村絵図」に高原の地名が記載されていることが判明しました。長磯村も旧本吉郡内であり、気仙沼市へうかがってその絵図面の調査を行ないました。また平成８年の調査で発見した志津川町・水戸辺の氏神様「二渡神社」についても熊谷氏より新情報をいただき、それをもとに再調査しました。



今回の調査地

レポート1　「高原」の現地調査

気仙沼市立階上公民館長・志田寛氏、主事・鎌田寛氏、リアス・アーク美術館副館長兼学芸係長・鈴木實夫氏、気仙沼市の郷土史家・熊谷康雄氏に「高原」についてお聞きしたところ、現在高原の地名は残っていないが、その場所に住む菊田家の本家の屋号が「高原」で、これを現地ではタカッパラと呼んでいるそうです。以前高原で貝塚の発掘調査が行なわれた折には、館跡といえるような遺構は確認できなかったが、葛西家家臣・阿部太郎左衛門（別名・最知玄蕃）が天正10年（1582）頃住んでいた館跡と言われているとのことでした。高原の現地では古い盛土跡や堀跡と思われる場所や、馬場跡と伝えられている階上中学校のあたりをご案内いただきました。

また、高原の菊田家にうかがい、本家・菊田一郎氏と、分家・菊田幸延氏にお話しを聞いたところ、菊田家は源為朝の流れであり、この場所には約400年前に大島から渡ってきたと伝えられているとのことでした。高原の敷地内には菊田家ゆかりの軽鴨神社や古い墓地があり、400年間住みつづけた菊田家の歴史が感じられました。『新渡戸氏系譜』から考えれば、高原に新渡戸氏がいたとされるのは菊田家が住み始めた時代よりもさらに140年ほど前のこととなりますが、そのような記録は残念ながら階上には残っていないとのことでした。

◀調査にご協力頂いた皆様とともに（左から気仙沼市立階上公民館主事・鎌田氏、リアスアーク美術館副館長・鈴木氏、階上公民館長・志田氏、気仙沼市郷土史家・熊谷氏）

レポート2　高原の地名のある絵図

高原の地名の記載がある気仙沼市立階上公民館所蔵「本吉北方長磯村分間絵図」は、現在リアス・アーク美術館に貸出中のため、そちらの一室をお借りして絵図面の撮影、調査を行いました。この絵図面は旧本吉郡内の４カ村を描き表した組絵図の１枚で、文政年間（1818～1830）に伊達藩の命令で作成した村絵図といわれ、各村の道路、土地の利用状況、村境や海岸線の距離などが詳しく記されています。

◀長磯村絵図（縦九六cm×横八八・五cm）（矢印が「高原」の記載）

「高原」の地名部分拡大▶

レポート3　２つあった「二渡神社」

平成８年に旧本吉郡内・志津川町水戸辺に、地名から新渡戸氏と関わりがあるのではと考え調査にうかがいました。その折、水戸辺漁港の氏神様は「二渡神社」であると聞き、この神社の由来などから新渡戸氏の足跡につながるのではと考えていましたが、それ以上の手がかりが見つからず現在にいたっていました。この神社について、熊谷康雄氏より、水戸辺から東に５km行った同町内・戸倉長清水にも二渡神社があると聞き、調査に行きました。戸倉長清水の二渡神社は300段もの階段を上った山の上にあり、ここは「後山館跡」（長清水城）として文化財に指定されていました。水戸辺の氏神様とこの神社の関係や、館跡の歴史の調査を進めることで新渡戸氏につながればと思います。

◀二渡神社拝殿

境内には「町の名木」に指定されている推定樹齢300年以上のモミの大木（樹高：20m／胸高周囲：４m）があります。

『新渡戸氏系譜』より
高原での新渡戸氏の動き

◆27代・新渡戸盛頼

27代盛頼は高原の城主となり、奥州探題・大崎詮持の配下としてこの地を治め、元良・牡鹿・桃生の３郡を領地としました。長禄３年（1459）に亡くなり元良郡浄海寺に葬られたとあります。

◆ 28 代・新渡戸頼胤

28代頼胤は元良・桃生・牡鹿郡の太守として高原に城を構えましたが、姻戚関係にあった大崎満詮の居城田村大越が近隣の強豪に攻められた時、頼胤は援兵として弟・頼次、常義を送りました。しかし二人とも討ち死にし、頼胤もまた隣国の主・葛西重村に虚に乗じて高原城を攻められ、寛正６年（1465）討ち死にしました。頼胤は高原の永祥山安昌寺に葬られ、頼胤の弟・高暁が安昌寺住職になっているとあります。

ありがとうございました

草花の提供

●10月～11月にかけて市内在住の菊愛好家瀬川安雄さん、杉山豊美さん、大久保孜（つとむ）さんより菊の鉢植えを記念館入口に出品いただきました。

●市内・沼畑哲夫さんより太素塚境内に植栽のためのチューリップの球根をいただきました。

関　連　情　報

◆在米国総領事館開催・日米交流150周年記念講演会で新渡戸稲造を紹介

ペリー来航から数えて日米交流が今年で150周年を迎えることを記念し、在シアトルならびに在ニューオリンズ日本国総領事館では在米国大使館の阿川尚之公使による記念講演会「150年の日米関係～日本人はアメリカの何を見たか～」を実施しました。講演では新渡戸稲造をはじめとする日米交流に貢献した先人達を紹介し、講演資料として当館より新渡戸稲造の写真を提供しました。

◆写真研究家・村田明氏新渡戸傳（つたう）翁写真の調査に来館

10月21日写真研究家・村田明氏（盛岡市）が、新渡戸傳翁写真の調査に来館しました。傳翁写真は明治２年（1869）に写真を撮ったという傳の日記の記述から、平成13年６月の青森県立郷土館特別展「撮された青森－絵はがきと写真で見る近代－」に、県内で最も古い写真ではないかとして展示されました。村田氏によれば、写真は湿板写真であり、今後の細かい調査で撮影した年代や場所等をさらに絞り込めるのではないかとのことでした。

◆10月1日～11月30日までの来館小学校

＜十和田市＞北園小学校／三本木小学校／米田小学校＜八戸市＞城下小学校／八戸小学校／金浜小学校＜五戸町＞切谷内小学校＜六戸町＞六戸小学校＜上北町＞上北第一小学校＜東北町＞蛯沢小学校＜三戸町＞三戸小学校＜名川町＞名久井小学校＜福地村＞麦沢小学校／杉沢小学校

◆太素塚清掃奉仕

10月５日・11月２日　本瀬戸山老成会／10月30日　あすなろ友の会上十三支部／11月９日　十和田稲生ライオンズクラブ　　ありがとうございました

活　動　報　告

◆十和田市称徳館「南部むらさき紫根染」展（会期：10月４～26日）へ当館資料『南部むらさきの由来』『紫草園』（中村省三 編纂／昭和２年 発行）を貸出

◆全国博物館大会に館長出席

11月６～７日大阪府で開催の第51回全国博物館大会に館長が出席し、シンポジウムでは「“博物館の望ましい姿”の実現に向けて」のテーマで議論が行われました。

◀開会式の様子

◆館長講演会

11／12　航空自衛隊東北町分屯基地隊員対象講話
（航空自衛隊東北町分屯基地）

12／２　東北農政局青森県事業所職員対象平成15年度管内ブロック別技術業務担当者会議研修会
（道の駅「ゆ～さ浅虫」）

◆新渡戸氏ゆかりの地調査で宮城県気仙沼市・志津川町を調査（詳細２・３面）

◆「広報とわだ」へ“地名の由来”記事を寄稿

平成15年度の十和田市広報「広報とわだ」へ、三本木原開拓に関わりのある市内の地名の紹介記事『知っていますか？この地名の由来』を寄稿しています。どうぞご覧下さい。

2003年12月31日～2004年１月１日

元朝参りは太素塚へどうぞ!!

★甘酒＆お神酒の無料サービスあり!!★

〈編 集 後 記〉

記念館だよりも平成７年の発刊から８年が経過しました。初心にかえり、市民の皆さんに情報を発信していきたいと思います。冷害と不況を克服して良いお年をお迎え下さいますようお祈りいたします。

発　行　太　素　顕　彰　会
十和田市立新渡戸記念館
〒034-0031 青森県十和田市東三番町24-1
TEL（FAX）0176-23-4430
E-mail:nitobemm@hi-net.ne.jp
http://www.towada.or.jp/nitobe/
印　刷　有限会社 岩 間 印 刷 所